類聚名物考　十七

和書門
類　二七七九八號
一一二函
一架
一六一冊

内閣文庫
和書
類　二七七九八號
一六一冊
二〇九函
一架
一二

10三ア1

内閣文庫
番號　和　27798
冊數　156（30）
函號　209　106

国立公文書館
National Archives of Japan

神祇十一
宮社

類聚名物考　十七巻

明治十三年謄寫

〇宮社部

〇内侍所　禁秘抄上

この称号ハ日本記私記見天徳焼亡ニ火の内を出させ給ひ
又内侍の神ともかしこところともいふへし
猶ホ委在

神皇正統

日本政府図書

内閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan

○続古今集

内侍所にてよみける　後深草院弁内侍

大かたの世ハうつるともます鏡影ハふかきのけしき新ハ忘れず

内侍所の鈴

○徒然草上巻　おとろへたる末の世とハいへど猶九重の神さびたる
有様こそ世づかずめでたき物なれ云々内侍所の御鈴の音ハ
めでたく優なる物なりとぞ徳大寺太政大臣ハ仰せられける

神社考 林道春 詳節

神祇官八神殿

神皇産霊日神（カミムスヒノ）　高皇産霊日神（タカミ）

玉皇産霊日神（タマ）　生皇産霊日神（イク）

足皇産霊日神（タル）　大宮賣神（ヒメノ）

御食津神（ミケツノ）　事代主神

以上八神此外加三輪明神ヲ

○延喜式云神祇官西院祭神八座ヲ

かしこところ　賢所

○明月記嘉禄二年六月十三日　二町許并絶立松明光猶退帰

留賢所御清警之又從車　車中拝無便宜

○雅遊醉狂集夷試筆

長閑我君万代のまもとけさかしこところの出前にふる鈴のこゑ

○注云賢所ハ即チ内侍所ニて禁秘抄ニくはし　又吏奥改

まつ中古元来称する賢臣内侍所へ請て鈴をまいり筋を

所おほしめす恒例之因て三種の神宝をしゅまいらせて

詳伝う坎の二首と合せ見るへし

野宮　乃のミや

○源順集　貞元元年の九月斎宮野の宮におはしますに
なのめならぬ野の宮人の植る花しくるゝ月にあへすなりけり

○徒然草　上　斎宮の野宮におはしますありさまこそやさしく面白きことのかぎりとは覚えしか　經仏なといみて染紙なといふなるもをかし

○花鳥余情　伊勢斎宮の宮ハ嵯峨の有栖川ニ在加茂の斎院の野宮ハ紫野ニ在

○續日本紀　廿一

○三代實録　四　貞觀二年八月廿五日伊勢斎恬子内親王臨鴨水大修禊事即日入野宮

○源氏物語　賢木巻

外宮　とつみや

是ハ内宮を天照太神の御座所として外宮ハかりに出ませし所にて離宮行宮なるべし今ハ内宮外宮のうちハよき事むつかしくいふ事あれどもそのもとハかくのごとくなるべし

○古事記上天照大御神高木神詔云々次登由宇氣神此者坐外宮之度相神者也

磯宮　いそのみや　伊勢

○続古今集　神祇　皇太后宮大夫俊成

神風や五十鈴の川の磯の宮ところよの波の音きのとけき

○樗地吐嚢編上氏云五十鈴川に載られたるは匂論のうちあり

磯宮なるを出て又出にへきこえる字を余前集をさして云ん

五十鈴宮　いすゞのみや

○古事記上於是副賜其遠岐斯〈此三字以音〉八尺勾璁、鏡及草那藝劔、亦常世思金神、手力男神、天石門別神、而詔者、此之鏡者專為我御魂、而如拜我前、伊都岐奉、次思金神者取持前事為政、此二柱神者拜祭佐久久斯侶、伊須受能宮〈自佐至能以音〉

○神皇正統記第十一垂仁天皇の御宇に大倭姫の皇女天照大神の御教のまゝに国々を巡り伊勢の国に宮所を求めけるに猿田彦命と云神まゐりあひて五十鈴の川上に宝物を守りて侍るよしを申しき。かの天逆矛五十の鈴天宮の図形ありき。大倭姫命悦て其所を定めて神宮をたてらる。宝物ハ五十鈴の宮の酒殿に納めらるるとも云り

斎宮　いつきのみや

伊勢の斎宮加茂の斎宮ともにいつきのみやといふ之　称号神祇部再出

○夫木抄六　元應元年七社七首　民部卿為家

みくやる斎宮は何としてハ花ぞのこるかきりハ其の那

同七

昔より斎宮にゐまする 房覧 六百番歌合賀茂祭　慈鎮和尚

にや孫まつ賀茂の川風

○金葉集　雑一　郁芳門院伊勢におはしまさむとする時

六条右大臣の北方伊勢に参りて侍けるに賀茂の斎の許に申をくれけるに

の音乃石乃みちはゆえされ

神垣のほとりそ見るにおもひはなきえぬ　六条右大臣北方

○万葉集二　長歌

いはしのいつきの宮に神風の吹かきまとはし　本ノ侭

○壬二集

永き世のためしにひかれ鈴鹿川こえていつきの渡舎のまつ

○新勅撰集　讃子内親王家宣旨

ゆふしてにいつきの宮の宮人の世にかはらぬ榊葉をとる

京極前太政大臣

○千載集

千はやふる斎宮の五十鈴川松とともにも君をいはへ

○夫木集　躬恒

音にきく斎宮の五十鈴川君も心の日ぞありける

○同十一　長明

うしろかるいつきのいもね手なれてやおりつる小松の枝の

内外宮

伊勢皇太神宮の内外宮をいふ又二宮ともいふ　うちとのミや　伊勢

○続拾遺集

神風や内外の宮乃宮柱千とせや君か御世と立へき　衣笠内大臣

○風雅集

神路山内と外との宮柱身ハくちぬとも末をハ立よ　後伏見院御製

○新千載集

神路山内と外との宮柱いく世をうけて君まもるらん　従二位為子

○夫木抄　廿四

まさ落庵花かりの宮神風や内外乃宮ハ万代まてに　鎌倉右大臣

二宮　ふたつのミや
伊勢太神宮の内外宮の二所を云之

○新続古今集
神風やふたつの宮の宮柱ハたつ心は世をまもるらし

若宮 わかみや 老せぬ宮

八幡宮を配祀に仲哀天皇神功皇后應神天皇この三所を
いはひまつる也若宮と申時は仲哀天皇を乃
ぞき奉りて仁徳天皇を加へ奉り若宮とも申侍る
老せぬ宮とも申侍れり

○壬二集 石清水若宮哥合

数ならで我身はふりぬ男山老せぬ宮もいかまれのけなん

少宮 せうくうや 日本紀日少宮

○文撰七命 張景陽 啓中黄之少宮發蓐收之變商○注李善
曰黄土色礼斗威儀曰少宮主政宋均曰声五而已必加少商
者書任重為設副也

たけのみやこ 竹都 俗 多氣宮 伊勢国

伊勢の斎宮のおましし所をいふこの事古人の説たしかの
ならん竹都といふよしくはしくこそ斎く伊勢の多氣郡に
おはす斎宮ある故に多氣宮を申せし俗都のごと
いはひやまはれる事大和物語にたけのみやことみえき
一本にはたけのみやこと見えたりよしとあるそのほか中古
よりかきつらねてるに見えて侍る續日本後記にたけ
しろある志るしあさにいふべきやうなれど地中古建武
の比は北畠源中納言顯親伊勢の國司に補任し壹
志郡多藝の地に数代住れしかもこの式部は國府なれ
れは古く斎宮もこの所にありしなるべし 續日本後記
巻七 天長九年九月の記に多氣斎氣斎宮の事見えたり

竹都　新林拾葉　十

○大和物語上　伊勢國に前の斎宮おはしましける時に堤中納言勅使にてくだりておはして　新勅撰集賀部　中納言兼輔
くれ竹のよゝのみやこときくからに君はちとせのうたがひもなし
御かへしハきこのかの斎宮乃おましまさねハたけのみやこ
となんいひける

○散木集
なくく竹都ハ雲あつこきあの霜なるこゝよのうさまきせ哉
度會郡なる竹都乃石あれハ姨捨山しきを數へて想ひる

○夫木抄
竹乃家にまかりける植て千世までもいそれそありなん　武蔵済九

竹の都　たけのみやこ
伊勢の斎宮のおハする所をいふこす事につきて高くの
守河れども尓け難しまゝく伊勢の地名と多氣宮
とふ所を都といひ語りたるにその徴ハ下に委しく志るし
又みやこハ京の字をあれハ都といひもますさ用ふるへし
○和名抄　伊勢多氣郡多氣郷
是ハ和名抄に見えたし郷名也今郡の名なるハいと多し
○延喜式神名式　多氣大与擇神社
是ハ伊勢の國の神社也大淀と云まじハ竹川の流りあるに志るべし
○凡河内躬恒家集に
おふちの葉の流るゝ時に竹川の瀬のみとりも色はのもとらなり
此家拾遺集に入り此竹川を河内の歌なりといふ人あれども
やまし伊勢の集の詞書に同事延喜十七年伊勢の斎宮の御料

に書しの名ある事をかへせるやうなる法屏風の歌めいたりし
うへ給屏山歩りしとて歌まて其の紙すく竹河の前の深よ
浅倉にも同浅為も廣あれど何れも是をば伊勢の名所なれ
ハ竹河もまさるゝえの人と志る人しるべき

○源順家集　貞元三年初斎宮の清濹の人々やすみ良する所にて
八月廿五日庚申の夜人々に集まりて何をかいまはの心を
神代よりいまもたえせぬ竹河のよどみはこゝにかへるらん
この歌も上にいひる解題の歌と同じく伊勢斎宮の歌なれ
しかまれて多氣宮の河竹を流るゝ河なれはとなへぬ也よ
まれもに是をよく厳操之者のしる歌を深の屏風には河竹
とくに入られしは精宮の縁起すくなくは其の心をも得ましくて了
有まれしまやいかゞ

○勝地吐懐編上　竹川

斎宮の流るゝ時は竹川の淵の瀬とも色かはるらん　新葉集　河内

此歌解題家集に延喜七年に伊勢の斎宮の御料の法屏
風の歌と家に伊勢の名所をよめる中にあり多氣斎宮に近
き所に竹川といふ所ありし　順集に云貞元二年初斎宮
の清濹の人々やすみ良する所にて八月廿五日庚申の夜人々
集ひて何をかいまはの心を

神代よりいまもたえせぬ竹川のよどみはこゝにかへるらん

此歌続後撰集に播自以下かも竹のよどみは君とこの
よくいひんと改めて載られたれと竹川とは歌によみ
かくしかしこの名所をよみきたるぞ

○夫木抄

竹川やゆきのきえれハすゝしと山田の原の松ふく風　隆心法師

斎院　さいゐん　山城国

○四季物語四月鴨長明　まつ当社に斎院さためおかれしまゝに法事ハ嵯峨のみかと弘仁の初めの年にいまそかりの法事まて伊勢のいつきの宮にならひてそ此法師の御掟志ろしめさせたまひし法性にこそ智子内親王とまうすなんそなはらせ給はぬ神の宮なといはれしまていつのほとにてか内の御祈のための御祈いまさはなりとそおほしめして経を染紙（佛）をたまはるを法をとゝめつゝ無きをなせなとて志らにはいささらもえならぬ斎宮の内つかさいむとていはぬことものゝ名をも仏のきたなるとてはいみしくえならぬ御神とまうすやう

○清原元輔集

千とせふるいつきの宮の庭の松いくその千代をともにかそへん

○夫木抄廿二　○名歌玉来勘　長明

言の葉にかけても何か思ひあるいつきの社乃志めの下草

○長明集にこれハ斎院の時人の問けるに返とてよめる　賀茂の社人なれハその故なるへし　斎の社も古社にあらん　名所にかもの賀茂御祖の一所なるへし

○詞花集　賀茂のいつきときこえける時斎院を

神垣にのりとなくなく斎籬にゆつるへきかは思ひけるかな　禖子内親王

斎院　古本拾遺集二　古代の親王

伊勢物語

おもひすゝし小稲をかけてまさけき中と神や涼し

龍宮　わたつみのかみのみや
海神の宮之後の世にハ龍の都ともいへり

○古事記上 尒鹽椎神云我爲汝命爲善議、即造無間勝間之小船、載其船以教曰我押流其船者、差暫往將有味御路、乃乘其道往者、如魚鱗所造之宮室、其綿津見神之宮者也

野代宮　のしろのミや

○再遊紀行　山崎闇斎　万治己亥

大観顯然爽氣流風行地上勢陽中要神聞説此遷

来四載奉斎野代宮

檜隈宮　ひのくまのミや

日前宮の出語りく

○

名草山とるや明米のつきかせん神つきしれき檜隈の宮

○積地吐懐編下和名に是ハ日前宮なれハ檜隈とあるハ語

く檜前をひのくまとよめる如く日前をひのくまとよめり

但日本紀を見るに　天照大神大盤戸にこもらせ給ひし

ける時出しまんへきすさのくさ諸神のしるひし中

に鏡を鑄るに神に鑄換しあるる鏡を日前宮にいは

まつるよしさくされハ前ハ後に當する心なるへし

ハひのさき日の前なと云へきに似たり志らぬ荒涼

なる似されと神学のこゝろにあきらかならし盃まへり

大嘗會の和歌々

黒木のむろ屋

黒木屋

○金槐集下　大嘗會のとしの歌

黒木もて君かつくれる宿なれハ万代ふともくちしとそ思ふ

今つくる黒木のむろやふりせて君ハかよハん万世まてに

○十訓抄巻一　天智天皇世をつゝしませ給ふ事ありて筑前国上座郡朝倉といふ所なる山中に黒木の屋を造りておはしましけるを木の丸殿といふ丸木にて造れる故也今大嘗會の時黒木の屋とて小柴の齋場所につくれるハ彼の時の例也

社稷

いまつりてくわすつゐ文

○白虎通 一社稷篇 王者所以有社稷何為天下求福報功
人非土不立不穀不食土地廣博不可偏愛也五穀衆多
不可一一而祭也故封土立社示有土尊稷五穀之長故封
稷而祭之也尚書曰乃社于新邑孝經曰保其社稷而和其
民人蓋諸侯之孝也稷者得陰陽中和之氣而用尤多故
為長也〻〻下略〻〻礼曰大社自為立社曰王社諸侯為百姓立社
曰國社自為立社曰侯社大社為天下報功王社為京師報
功大社尊於王社土地久故而報之〻〻社無屋何達天地
氣故郊特牲曰大社稷必受霜露風雨以達天地之氣社
稷所以有樹何尊而識之使民人望見師敬之又所以表功也
故周官曰司社而樹之各以土地所生尚書曰大社唯松東
社唯柏南社唯梓西社唯栗北社唯槐王者自親祭社稷

何社者土地之神也土生萬物天下之所主也尊重之故自祭
也

禁淫祠

○唐武后時河南道巡撫大使狄仁傑以呉楚多淫祠奏焚廿一
千七百余所独留夏禹呉太伯季札伍員四祠

天津社　阿ま川やしろ

○夫木抄 巻一　立春 文治五年閏四月百首　前中納言定家卿

けふはまつ天津社の榊葉も春のひかりをさしやそふらん

社　やしろ

○日本紀通證ニ重遠曰凡造宮殿皆用長度八尋（タカハカリヤヒロ）蓋古昔造云殿之長度也○注今按八則天地之全數尋之爲言廣也蓋有廣大全備之意殿戸名也殿各有名今稱神社云也志呂蓋八尋殿之轉也

○今按ずるにやしろハ八尋殿の轉語なりといへるはその謂ちかゝらねと
やしろハ八尋のこといはれなく神社のみをいふなるにあらず
尋ハ廣さにあらず長くたとへたるへしこれハ屋代なるへし
屋の神まつるにも古くハおほくていふ也代ハ其地を割
ありてしたる所をいふ今も畠の種子物おふせる處を志呂
といふ苗代なとの如し城をハ封とも志呂ともいふと
その意ハ山背なとも方城とハ

杉社　すきのやしろ

○金槐集下　三輪社を

いまつくる三輪のはふりか杉社すきにし事はとはすともよし

○夫木抄に現存六帖の歌とて出たる　法も経て

なてつきて年なる河やさしに三輪の社のますしあるらん

とそ見えは浅宮を仮に作れるさ満く夫木抄に杉社あり

社壇　白氏文集二

同上　和古社　風抜樹根出雷霹社壇間

神社考詳説　林道春

諸社之事後朱雀院之長暦三年八月定為二十二社ト奉幣ノ勅使用其氏子ノ

伊勢　王一人中臣一人卜部一人齋部一人

石清水　源氏

賀茂　参議一人五位一人

春日　藤氏

梅宮　橘氏

吉田　藤氏

北野　菅氏

右此等之類是也宣命之紙者伊勢ニハ用ニ青色ヲ賀茂用ニ

紅梅ヲ石清水ヨリ已下ハ用ニ黄紙ヲ
伊勢石清水ヲ稱ス宗廟ト皇帝ノ祖神ナルカ故也賀茂松尾平野春日吉田等
稱ス社稷ト又凡テ勅願尊崇之神社ヲ惣テ名ク社稷ト又爲ス其人之苗
裔者ノ爲ニ祖神ト
延喜式神名帳所ノ載ル三千一百卅二座其ノ中七百三十二座ハ者自神
祇官奉幣ス爲ス其二千三百九十五座ハ者諸國國司受ケテ旨ヲ獻ル幣帛ヲ
除災難ヲ祈ル五穀ヲ也二月祈年祭ヲ爲ス始ト
石清水吉田祇園北野ハ不入延喜式神名帳ニ是ヲ呼ス之式外ケノ神ト

七社
比叡山の日吉御神ハ七社ヲしめまされ　なゝのやしろ
七社　新拾遺集十一

○拾玉集三　十題百首　神祇日吉
三世まてはまよひあきける紫の雲の衣をおもへ七の社
同四　百首同詠分今　述懐
我たのむ七の社のゆふたすきかけてもむつのみちにかへすな

○続新古今集　神祇　俊恵法師
さゝ浪や神のひさと河の瀬ましも跡をたれます七の社

夫木抄四　亭子院歌合　伊勢　八雲御抄第一

いそのかみふるの社の桜花こそみし春のいろやのこれる

神明社

神明墓　前漢書郊祀志　同上或曰東北神明之舎西方神明之墓也○註張晏曰、神明日也日出東北舎謂陽谷、日没於西、故曰墓、濛谷也、師古曰、此説非也、蓋總言、凡神明以、東北為居、西方為冢墓之所、故立廟於渭陽者也、

神明之宅

○淮南子七精神訓、天静以清、地定以寧、万物失之者死、法之者生、夫静漠者神明之宅也、虚無者道之所居也、

○神館（カンダテ）

明衡往来又依春日行幸装束等事内丑一刻退出
川今日て家神殿へ所訪恐惣也

禿倉（ほくら）

○山城名勝志乙訓郡云　天満宮縁起云号天神口禿倉尚存
とは縁起ハ慮而筆中并京賢判作れるものや

○ホクラ禿ハ秀の誤ニ秀さホとよめり　万葉ニ秀倉さ
ホくらとよめり　古へてホといへ物のすくぬきでし秀
をいふ　草の穂といふも　同し　若菜秀といふも
花の咲出たるをし

宝倉　和戸

法枌社　吉記云寿永三年四月一日式部権少輔範季朝臣来談云崇徳院法枌社無事未定法云禮可被用何物乎之由尼議云々

叢祠

明月記嘉禄元年十一月十六日前納言教成山階去木無休止時剪叢祠之木灌木以其木欲充新造之社柱木寺山上祝之日忽中風言語断絶子息僧法眼馳向由申之云々

子良舘　こらのたち

伊勢太神宮の神饌を奉る所を云　そこに御子良子（ヲコラコ）とて童女を置て神供を奉る事をつとむる也　祭典式といふものにいその事見えたり　俗にはおこらこともいふ

○芭蕉翁発句集に子良舘の後に梅有といへむ

此子良子の一もとゆかし梅の花

氏社　うぢのやしろ

姓氏につきてあがむる所の神社也　藤原氏は春日を祭て氏社とするたぐひ　氏寺もまた同し

○明月記寛喜三年八月十八日明日立春詣春日之宿願遂欲之數賀家之所見年来懈緩之官途事已絶望出世之計已思切詣最後為我氏社也

○氏寺　寺社　宣胤卿記云 法華堂書写本 奈良京之昔者
以春日社為氏社以興福寺為氏寺平安城之今者以吉田
社為氏社以法成寺為氏寺随社頭之興廢任淵瀬川之
栄衰者一天安全四海平定殊可抽藤氏繁昌之祈禱
者惜之莫忘矣

文和元年十一月十八日
神祇長上權佐家 于時兼忠
御筆名

諸國一二宮之事

○建武二年旧記　武者所掌可存知條々内一二之宮之事本家并領家職事可停止其号之由以前治定了於社家地并神職社立地頭諍論被君寵可被停止之其神領地頭職者随事之体返可付之云々

今考ふるに諸國に一二の宮ある事其始詳ならず、一宮記といふ物あれど是も後人のしわざなれハありしともなく、長明の四季物といふ物に式の事ちかきを、さるハ其書もまた後の偽作なり、先かつ宗ハ高く神領の多きに付て其國府にて幣をも奉りしに依て一二の次第ありけるにや、かくて一宮府にハ惣社とて遷せる所あり、今もなほ其名のこれり

○北條九代記二 諸將連署訴梶原景時条 景時父子誅戮
すへきよしにて子息親類をおとし 相州一宮ニ下
向す
○同五 大炊渡軍条
五日の夜討ニ尾張国一宮ニ陣して軍の手分をせら
れたり
○同八 上総権介秀胤ハ泰村か妹聟にて総州一宮大柳の館
ニあり
○いさよひの記 阿仏尼鎌倉下向道記 また一宮といふ社をすくとて
一宮名さへなつかしふたつなく三つなきのりをまもるなるへし
○抑この記ニ美濃国すのまた川の河ニ式一宮ありてそ
の河ハ尾張国おもとていふ躍りありさふらふハ先もなく
濃のあたりなるへし

備中國一宮

吉備津宮

○太平記三 桜山四郎入道自害事 去程ニ桜山四郎入道ハ
全備院本作兵衛入道慈俊 備後国半国ばかり打従へて備中へや越まし安
藝をや對治せましと案しける所ニ笠置城も落
させ給ひ楠も自害したりと聞えけれハ一旦の附勢ハ
皆落失ぬ今ハ身を離れぬ一族年来の若黨
廿余人そのこりける 此城こそあすこ事を昔ハ我か祖父の
ゑて四海九州の内天地ものこてまつりけれハ社も
隠れなき跡きはまりて憑むすへき事はなくて尸を
さんまうハとて当国の一の宮へ参りて八才ニ成りける最愛
の子と廿七ニなりける年来の女房とを刺殺して
社壇ニ火をかけ己か身を腹かき切て一族若黨廿
三人こなか灰燼となりて失にけり

○夫々考物吉備津宮詐孝霊帝皇子彦五十（イ）
狭芹（サセリ）彦命亦名吉備津彦是備中一宮也

惣社　そうじゃ

○今名ある處ハ上野の國をすへ治る國府に在へき之
或説に此ハ今ハ旧府と称りし群馬郡の内今ハ府中と
云甲斐乃府之そこに六社明神ととなふ是古ヘ國府の惣
社なり上野国府に於て赤城山の本社今も惣社といふ地あ
りて社ものこれりこれ古への国府なるべしそれを別
俗にハ一ノ宮とも云之その由ハ官より幣帛をいつかれ
し時に国の事その国中に在る諸神をここにまつり
め祭りて政所よりて遙拜の所とてここより官幣をつ
かつに取扱ひてそれを一の宮二の宮三ノ宮なと云之
このあたりやや物さひえたり上野国よる廐橋のこなた
く利根川の西に惣社村とて今在そことに惣社の
舊跡在下総国にも惣社村有りその外所々に在

○明月記天福二年七月七日朝天晴川崎惣社邊雜人
已為群集る雜人(狂者中央衆今飛者)六人云々
○北條九代記七　昔佛法こゝに盛にして流布しける國郡に
祈願所を立菩提所を作りて國々是を崇敬す禁
裡の御領所國司領郡司領家領に補せられし
の族に一寺を建て國分寺と名付け國司の菩提所と
して寺領を付らる又一国に惣社を立神護寺と号し
國司の祈願所として社領を付らる
○四季物語(鴨長明)　是もし當社上の御社は別雷の
御神にて神はやまと河合の宮と言賀茂に跡垂給ひし
を天武の古くよりさけるうへ　なかなか後一条の古
へにまきこの御代の惣社とそ申しけるとなん

河社

かはやしろ

貞徳曰河社とは夏の河にかまへたる所をいふなり惣て社の
字は所と云之人の家諸を住する所を社と以て
今按するに此說は誤謬之皆植の說なり

雜和集　巻十　かはやしろの事

河社　西七　後拾遺集

河社二首　夫木拾遺巻之二

○拾玉集　六　夏

河社河そふ心の涼しきややかて神のめくみなるらん

○夫木抄ハ　資盛家合　五月雨　俊成卿

五月雨ハ雲まもなきを河社いかなる衣をほしあへすらん

まつやしろ　松社

この言未詳　つまや　四阿（あつまや）　つまなとハ爪の言にて檣つめなと

いひたるも端の意ハもとよりまく爪の意之軒のつま

なといふも端也もとよりなく櫛の爪のことくあたる

ようなるかり清香の王莽傳に激とすへきなるつま

社もいその意にて妻とまハ仮字之未詳にて意今按業

に松社ありこの類也

○夫木抄　中務卿親王家哥合　つまやしろ　権僧正公朝

草分のましの中のこのつま社こや夜もすからあるる部

祓殿

神事詣く潔祓する所乃殿といふ　はらへどの

○蜻蛉日記廿旧激詣の所からうして房まりて例のぬ
とのくして出なんとす日もまたてぬ雨や風なやます
火ともしなれと吹きちていふゝしく晴されは是の房のこて
ちりしていとゆゝしいかなるまてえんかせふ
からうして祓殿にいるかれれは雨もきれれずなし
くるのあかりいとかけしき城の事あかりときく浩
まゝのする石とり仏ちゝとりなかし

寶殿

○拾玉集五 建久二年九月如法経のまねて天王寺太子の御
墓所にまゐりて そのついでに住吉に詣でて 八月一日住の江
殿にまかりて 百首よみて奉る之次 すみよしと云ふ 次のとも
越おほくかへりて法経の料紙に左大将家にかきまつりて
宝殿にこめんとするに小筆をもて後成人なんとて忌
ともに今もおくにかくかきつけゝる

寶殿

○文選雑体詩 江文通 列漢構仙宮闢天製寶殿

御舎 みあらか

宮處をも阿良加と訓るは在所とする阿りかといふなるべし

○古事記上大國主神云ゝ僕者於百不足八十坰手隠而侍僕子等百八十神者即八重事代主神爲神之御尾前而仕奉者違神者非也如是之白而於出雲國之多藝志之小濱造天之御舎

廣前 ひろまへ

○後拾遺和歌集 第廿 神祇 よしつね

いかめの下まるとも神の德むなされはなそ杉のひろまへの

或人云廣前に二説あり神前の白砂をいふ 或は神前に経かかりて廣前にはひざまづきてと云是又と

又は廣前とは神社にて長衣とよむといふなるべし

○寶前

○明月記嘉禄元年十月十八日又云資親九日莭ニ宝前ノ社壇
椋未習り也けり被附云々

神舘　かんたち　かうたち

○新古今集

斎院に侍りける時かんたちにまく　式子内親王

わすれめや葵を草に引むすひ仮寝の野への露のあけほの

法輿舎　ここうやどり

神の門守にて神輿の出おはします所なり所をさ云ん
さまも車舎なといふるの名なるへし

○清少納言記　一本種はいさつなる屋ありしきこては
何する所ぞととひしかは法こうやどりといひしをめ
てたしい頃より著なるお御門のうちて侍るにいかに
詞りし始には何之尻を殿之の二方おもてあふれて法
くりとらくへしふ多れなかりし

とりゐ　鶏栖 和名抄　鳥居 借字 和名抄　華表 義訓　神門

このこと古くはききえしは神門神戸をいふなれともそれ
もなれのより所なし又華表をいふこれをもこの和さき
に幸置をあけなんこれは唐の地にてその事大に失之お
しておもむ又をつくりなぞをいふへきさまにてもこのうま
こらは華表のまねなす目えたる人おもふへし華表
は多くく墓のまへにしあれは甚神すこしは忌へきなると
人えらんは華表ハ凶事部陵墓条まりくえさり

花表 凶事部ニ出

○揚升菴外集七華表漢書註作和表礼記字林俱作植表公室視植
楹注植墓前表柱也華和植三音相混尚書植夷底續水經作
和夷植譚新論晋中經簿作華譚則華表作和表植表義
實叶矣

○述異記上　廣州東界有大夫文種之墓墓下有石為華表柱石

鶴一隻又越王勾践之謀臣也

○明月記文暦二年十一月八日於鳥居下馬之後前駆取松明

○後漢書四十四楊震傳因飲酖而卒、時年七十餘云云 先葬十餘日、有大鳥高丈餘、集震喪前、俯仰悲鳴、涙下霑地、葬畢乃飛去、郡以状上、時運有災異、帝感震之枉、乃下詔策曰、故大尉震、正直是与、俾匡時政、而青蠅點素、同茲在藩、上天降威、災眚屢作、爾卜爾怛震之故、朕之不徳、用彰厥咎、山崩棟折、我其危哉、今使太守丞以中牢具祠、魂而有靈、儻其歆享、於是時人立石鳥象於其墓所

○今ある事によれハ鳥居といふを於墓のまへなるにも似たり
又列仙傳の丁令威より花表の事に似たるなるへし

○千加屋筆に鳥居の事異説多く列仙傳に載たる華表の事なとかけ出て華標華表の字を用ひる人多く行り爾雅第四釋宮篇曰鶏棲於弋為榤鑿垣而棲為塒疏曰弋也詩經鶏棲于榤といふを見え字彙に橛其月切門中橛為閾又木段即弋也と注せり鶏棲の号因て来るなるへし吾大日本古来より上長押とその上との間に小柱ありて是を鴨居といふ節鶏棲于榤の処にして水鳥の名を用ひて火を防くの祝ときて類聚雑要なとに母屋庇等の指図を載られとも人家に鳥居の号ありて神社の出入口にかきり神地といふ限をしらしん物に笠木とその下との間を鶏棲とす俗にいふ通しやきてきこの為に鳥居なれ全体の名にハあるへからん伊弉冊尊二柱の故事にかけて鶏栖を設けたるなるへし論にたらん

○或人云林春斎の書抄にも云るみだりに鳥とハいやしき唐人下部
をいふさるものハ主の供しても神社の前まてハ行事ならぬ
で花標の下にて止り然れハ鳥居ハそこまでといふ事のよし
神家の傳へといひしとかや
○今云みちにはたる鳥の棲家ともなし　つるの巣合なれハ
信へうらん

鶏棲　とりゐ
○淮南子八本經訓大構駕奥宮室延樓棧道鶏棲井幹
標株欂櫨以相支持○鶏棲井幹復屋㒵井剋花置其中

○新千載集　後鳥羽院
立よれハつきせぬものよ鳥居のもみちの花のしつくみけり

○新六帖
石つちの鳥居にきゐるし杉のくれこの山中の社のまへとハ

總合鳥居　さうがうのとりゐ

○近江國叡山山王の社の鳥居ハ笠木の上に又三角に立たる笠木あるを是を合掌の鳥居といふ江戸東叡山の山王の鳥居もこれに同じこれは神道名目類聚抄に両部習合のとりゐといへり仏家の内にも山王社に此鳥居あり

○三光鳥居　さんくわうのとりゐ

大和國三輪山にたてる鳥居ハ二柱の左右にちいさくて一段ひくき笠木有る鳥居をすへて柱四本をたて三所に見えたり三所ありと門扉（とびら）をさしたり是をハ三光の鳥居といふ江戸護國寺の観音堂の後に稲荷乃社にこの鳥居を二されたる扉ハなし　その故をしらん

三柱鳥居

○三方に三角に柱を三本立て上に笠木置ものなり今
世に珍しきに作れる鳥居くさのみ山城国葛野郡の
木嶋といふ社の森の中に在て清水の井の上に立
てあり

鳥居　古今拾要巻六　白組部の下十一

華表

○仮寐夢 第四 鹿海庵主著 先生曰予視諸神祠必建華表柱聞之古
者皆用木後有石柱有銅柱欲其不朽也華表訓止里伊説繁
多也姑挙其一二一云有西者謂之鳥居酉鳥和訓同矣在東者
謂之酉居則在東者謂之卯居不通之説也二云承塵下横
木謂之鴨居取其名於水物以壓火災居井訓同以表天真井
義甚迂也三云象天字形甚無義矣四用衡門字於鳥居訓
義甚昧也五六昔八咫烏神教神武帝曰大に祀神須植神門
左右植二柱以表両儀上横蓋棟以象蒼天下横一木以象陸
地中施竪短機以象心之神明欲使蒼天見之知天地神明之
理以假神名建馮虚説請擇焉公曰據文字按之表木
也昔馬援南征植銅柱於交趾以界蛮漢名曰表柱遼東
城門有華表柱鶴集柱頭蓋據此故事訓鳥居也先生曰
嘗閲列仙傳有華表圖柱加彩色銅鏤言華者和也然に一

桂耳曰杜詩天寒白鶴帰華表註云橋前二柱曰華表因知
或二或雙共用之皆名華表矣表者表識也由是觀之神
祠之表也且古歌云道頼乃華表耳揭烏杉我久此山中原
社有此者是也相樂郡光明山古官道十八町寺旧在山頂凹
処不可見鳥植表柱於木津渡頭今也無華表其地云華
表渡因知植之者俾人知有神祠也

○童子問 本下蕭所 華表奈何圖見列仙傳丁令威本朝之鳥居
用此然形異也神道家云鳥井彼家所秘之事而盖有以
豈華表哉 ○接華表説詳韻會小補

宮柱

こゝやもしらう　宮柱太敷座　万葉の記

○新古今集　神祇　俊成卿
神風やいすゞの川の宮柱いくちよすめとたてはしめけん

○続後撰集　神祇　俊成卿
宮柱したつ岩根の五十鈴川万代すまん末をまもるは

○続後拾遺集　神祇　俊成卿
家の中子
かけまくもかしこき君の宮柱なかきためしハいくそしるらん

○新後撰集　平時村
いかなれハ神もいくよをすくるらん大宮柱いまもくちせす

○続後撰集　後西園寺前摂政
動きなき國のまもりの宮柱たてしちかひハ君のためなり

○続古今集　文永二年八月秋田家歌合侍りけるに
宮柱たつるみよ川の秋の月又いくかへりめくりあふへき　荒木田延季

○続拾遺集
神風や内外の宮の宮柱すくなれや君の御代をなかへき　衣笠内大臣

○風雅集
神路山内外の宮の宮柱身かくちぬとも君をかたてよ　後伏見院御製

○新続古今集
神風や二の宮の宮柱いくその世をまもるらし　遊義門院

○続後撰集
まもるなる三笠の山の宮柱たてしちかひは今そしるす　前太政大臣

○出所未詳
白川の宮のおりしの宮柱たちそめたてしちかひしるらん

宮柱　みやはしら

○古事記上　於宇迦能山之山本於底津石根宮柱布刀斯理（フトシリ）於高天原氷椽（ヒギ）多迦斯理（タカシリ）而居云々

○新後拾遺集　神祇
世のためうち外の宮の宮柱すくなる神路の山にすむらし　後九条前内大臣

○金槐集　下
宮柱ふとしき立て万代に今そさかえん鎌倉のさと　若宮の宮の御　続古今集

○いさよひの記　阿仏尼鎌倉下向の記
廿七日伊豆の国府といふ所にとまる
いまた夕日のこる程に三嶋の明神へまゐるとて詠みてまゐらする
あはれとや三嶋の神の宮柱たゝこゝにしもめくりきにけり

御巣　こたて

此巣ハすなはち神巣と云ふ也人も穴居栖巣なといへる名の
巣のめぐりかりその居所を巣とハいへり古事記ニ上古
神代のみさいまんとて天之御巣とハあるへし

〇古事記上大國主神荅白之僕子等二神随白僕亦不違此
葦原中國者随命既献也唯僕住所者如天神御子之天
津日継所知之登陀流此三字以音天之御巣而於底津石根宮
柱布斗斯理於高天原氷木多迦斯理而治賜者僕者於
百不足八十坰手隠而侍

かたそぎ　片削　片殺
千木のかたそぎといふを畧してかくいへり

〇壬二集　　夫木抄口花　家隆卿
八幡山宮の榎も片削の行あはぬ乃霜のいろハ久しくみえけり

〇拾玉集　四　神祇
かたそきの行あはぬまも嵐ぬへし　廿世多栖て住吉の神

〇金槐集中　名所部
住吉のまつことせしまん（氏）経ぬちきの片削行あはしして

氷椽　古事記　ひぎ　ちぎ

○これを古事記ニ今本ニ比支と訓る事其故いぶかし　或ハ云
氷ハ水の字草体を誤るとて其文て書る誤字之ともいひ
り知の字体ニ似たれハ又とひるさなめてハこのくし　又昔
ハしきとひしを後ニちきといひしもまゝきこえるへからん

○古事記上　於宇迦能山之山本於底津石根宮柱布刀斯理於高天原氷椽多迦斯理而居

（ウガノ　ソコツ　フトシリ　ヒギ　タカシリ）

○拾玉集
はるかなり幾代か更に訓なからん出雲の宮の木の片そぎ

○和か屋草九　神社の椽にちぎこのつき木といふ物昔より
人家の屋の棟にもありしにや　京より三里斗北なる岩野里
の雲ヶ畑といふ村の家の棟には今も有る事あり　所の人に問ハ
風まけといふ物ありて茅葺の屋根を風にとられぬ為におく木なりと云
此名を取りてかつをぎと云由なり　昔ハ家ごとにおきたる物なり故
風おきとも又かつを木ともいへるにや　椽は居ニはなれていふさる具
又神社の家ニハ大切の事とする故　御殿ニハ中絶せず
人家ニ用ゆるハ風のおそれなき所ニ置ざれば　ちぎとハ風木と
書く　風をちとよませり　東風をこちと云ふ事ニて知るべし
本音にハあきれども風木の字意を考へ知るべし

○金槐集中 名所並
住吉のまつとともにハ年へぬちきのかたそき行あひまて

○玉葉集
天くだる神やちかひしはかの湊なるちぎ千木のこのしおもき　中原師光

○風雅集
片そきの千木ハ内外にかはれともちかひは同しいせの神風　度会朝棟

○新千載集
君か代にあふ今の宮の年ふりてにうけつる千木の片そぎ　入道京極前関白

○続後撰集
久かたの天の岩戸幾代へぬらんすみの宮の千木の片そぎ　後京極院

○拾玉集
まつあるハ萬代にまても別ぬらん出雲の宮の千木のかたそぎ

削木鰹木　ちぎかつを（ちぎ）

○秋斎間語曰 神社の棟にあるちぎかつを（ちぎといふハ）昔ハ人家の屋の棟にもありけるにや 京より三里許北なる岩坂小野人里ら畑といふ村の家の棟にハ今も所々にありとぞ人のいへるハ風木けなかれにとかいふなりけれハ みなおく木と云 此名を世知まらでかつを木と云よし 昔ハ家を皆萱葺なる故 風おさへにせし物とみえたり 檜皮にあつてハいはれなき事なり 神にまつる社ハ大切の事とする故 皆おもてハ中々輸れなき人家に用ゆるハ風のおそれく それ故ちぎとハ風木とかく 風ハちとよまれたり 東風をこちといふにて知べし 本音るハ非れとも 風木の字 是又可然

神籬　ひもろぎ

是は二のうちに神籬とよめるは檜垣の意にて神社には垣かひまするその意にいふなるべし　秘密垣なるへしとも見ゆれどもいかゞといふ詞は秘の音語より出たる古言にもあらずかし　後世の神道家者流には神秘のよしいへど何の證もなし　日本紀にみえし所さるなれどもまだ其見えぬ　又式にも祭の福肉を胙といふをまた神へまゐらし物なれば其亭祭の部に委く出たるも同例なる事也　和名抄　神籬

○万葉集

神なびにひもろぎたてゝいはへども人の心はまもりあへぬもの

玉ぐしのをてらの木のかゞみに神のひもろぎそなへつるかな

○源順集　　四月神まつり
夏衣きてこそまつれあまくハ神のいかきときてかへん

○夫木抄七　堀河院御時百首卯花　俊頼　○散木集
卯の花の神のいかきと見ゆるかな枝てちりとそあきもたれか木綿かけて みんも

○同　廿四　二条太皇太后宮大弐
又枝きしてあつあつひゞめる雪をよふ神のいかきとそ見ける

この歌ハ榊葉にこそうたつる雪のとけしふる心なれくてあつもるなとを神のおろしとて人あるをいれなるよめるとそ

瑞竹籬　　みづがき　　神祇

○金槐集下
瑞籬の久しき世より木綿たすきかけし心ハ神そしるらん

○新千載集　　権中納言為明
世とともに榊葉とるやみつかきのひさしき神に志する跡の

○続千載集　　皇后宮
雪ふれはあとそつくにのたちそめの[illegible]神のいかき

○沙石集一
伊勢太神宮御神宮内宮ハ瑞籬の大日四重曼荼羅をかたとりて玉垣瑞垣あら垣なんと重々あり

○玉葉集　　中原師光
天くたる神やちかひをこの瑞垣の湊にちかき千木のかたそき

○新葉集
何かひ字神も[illegible]れハうけそくよ錦[illegible]のこの瑞垣

○六百番歌合
久かたの天照神のひかりまてあらそふものハ賀茂の神垣

神垣
みつかきとおなし　かこかき

○拾玉集 上
神垣やもとえの松にちきりおくこともすゑまてめくみあへし
荒木田神主成定

○同
神垣やおのかときもるなりぬらんこすゑにまつ風のこゑ
荒木田神主元延

○新千載集
山さくら咲そめしより神垣ハ花の八重垣雲のとそみる
源和氏

○続拾遺集
神垣に咲そふ花をとへてまつり風流るゝ世知ぬる
おもふことのあやのつかひとてまつり乗たる人ハお

○貫之集
不くもく
ゆふかけてまやくかけ給神垣のこもりの山のやまくさせん

あらがき　棘垣

○沙石集一　内宮ハ胎蔵の大日四重曼荼羅をかたどりて玉垣みつ垣荒垣なんと重々く

神御室　かみのみむろ

○夫木抄 第一子日　家集社頭子日　清輔朝臣

松ハいな神の御室の子日にハさこのまね千代乃ためしかせん

○続千載集　従二位家隆

千早振神の御室乃ます鏡うけていく世の秋をミるらん

○新勅撰集　同

榊とりのけし御室のます鏡そのや山端乃月をミるらん

御室　こむろ

二室山ハ大和国ニ在名所之まゝ神のおはします室を
さす御室といふ名所ニ何らん御社法度といふもおなし

○新勅撰集　　家隆

榊とる夕しハ御室のます鏡その山のはの月ここくもれ

丹玉垣　にのたまがき

○夫木抄　懐中抄　　藤原隆祐

めくらして誰のしわざん作りまうけ波よりつゝく朱の玉がき

○拾玉集三　十題百首　神祇　賀茂

きこゆなる賀茂の川風さむく松ふけて心こそみる朱の玉垣

○同四　日吉法楽百首

まいる人の九度の詣とのこす雲ハ神のしらする行への玉垣

○金槐集下　社頭松風

かすまする朱の玉垣神さびてやれたるこゝする松風ぞふく

いがき

○拾玉集七　　祈社恋

ねぎかへるいかきのうちのあまのまろ衣もよそにそ秋も来にけり

○續千載集

雪はらふ袖つゝくくなとみえけるゆくすゑとをき神のいかきは

○新拾遺集　　禖子内親王

わすれめや神のいかきの榊葉にゆふかけそへし雪の明ぼの

○續古今集　　祝部成茂

さくら花ちりかくるやとかきこしても神のみ垣に身こそふりぬれ

○古今集　　貫之

ちはやふる神のいかきにはふ葛も秋にはあへすうつろひにけり

玉垣　たまかき

○沙石集一　内宮ハ胎蔵の大日四重曼荼羅をかたとりて玉垣

みつ垣あら垣（かつをき）なんと重々

○夫木抄七　卯花　経家法師

卯の花や玉垣しろく咲ぬらんまつのをかくる雲の川

○夢舟集

玉垣のみつの湊よまくれハ釣のふね人ハ花さたむくる

神玉戸　かみのたまのと

○夫木抄第一　文治七年毎日一首てこす　民部卿為家

年の始神のたまの戸いまあけて八字（きえ）の雲の色そけふらん

開扉　ことひらく

○夫木抄第一　神祇　百首歌　藤原家隆

神山の石戸のあけは八月さえて有の神言に法戸ひらく

しりくめなは　しめなは

○古事記上　天照大神逾思奇而稍自戸出而臨坐之時其所隱立之天手力雄神取其御手引出即布刀玉命以尻久米縄控度其御後方白言従此以不得還入

石壺　いしつぶ

伊勢か家にてよめる

○新後撰集　延成

掛そて八の石壺ふるし君をそ祈る内の人

○百首　家季元也

君か代ハさゝれ石つぶの中よりて千とせいの数つもるらし

志で　垂

○金槐集上　夏

こゝきつまかやゝ杉枝に引志でまゆまれつゝて神さとめん

同下　社頭雪

三輪乃山杉の葉志ろく降る雪ハ神のかけたる志でとまかへり　しでとそみけるイ

注連
顔氏家訓上 風操篇十七偏傍之書死注連章断 注連 志め
注連 和名
○金槐集
三輪山の神智の御山に引注連のうちはへてのこ落る瀬々
○山家集 元日鶯
志めかけて立たる宿の松ニ来て春の戸たゝくる鶯のこゑ
西行上人 ○夫木抄第一正月元日
○拾玉集一 法楽百首 冬
あさくらの杜のこのまはかへせとも昔ハと引き志めのうちかな
○山家集
流れ出てミ跡たえまなきミかハ宮河よりや渡会の志め
○夫木抄
○壬二集
永き世のためしよひのん鈴鹿川越ていつきのつくしゆのしめ 雅経
○玉葉集
神垣に引志め縄の跡すして君か千代へんしるしとそおもふ 津守国冬
○続後拾遺集
君か代を祈るこゝろはしめ縄の神の心もさこそうけらめ 祝部成久
○新続古今集
神もまたうらすんよとやさ志め縄なきまもりの花の咲らん 祝部成茂
○新千載集
五月きぬミとせ代小田に注連引て神の宮人早苗とるらん 従二位家
○新古今集
いやしく草葉ハこしめあつて君と神との恵をそしる

齋場　いには　ゆには　いつきのには

十訓抄巻一　天智天皇世につくしにおはしまして筑前国上座郡朝倉といふ所の山中に黒木の屋を造りておはしましけるを木丸殿とて名木にて造れる故也今大嘗会の時黒木の屋とて此悠紀の斎場所につくるはかの時の例也

国立公文書館
National Archives of Japan